

2025 年度支援展覧会選考結果

2025 年 8 月 31 日(日曜)、小川知子(大阪中之島美術館主任学芸員)、実方葉子(泉屋博古館学芸部長)、吉岡洋(京都芸術大学文明哲学研究所教授)、岩城見一(京都大学名誉教授元京都国立近代美術館館長、本財団代表理事)、井面信行(近畿大学名誉教授、本財団理事)を選考委員として、2025 年度支援展覧会選考委員会が開かれました。まず、委員の互選により、実方葉子委員が委員長に選ばれ、次いで、応募のあった7件の展覧会について審議が行われ、その結果、1件の展覧会に対して、支援を行うことが決定されました。なお、委員会終了後、来年度の公募に向けて、応募条件や支援件数、募集期間、広報の仕方などについて議論が行われ、支援事業の趣旨を明確かつ正確に広報する必要性が確認されたことを記しておきます。

選評

委員長 実方葉子

応募件数は全部で7件であり、内容的にはいずれも興味深い内容であったが、作家自身が参加する作品発表の場を提供するというより、明確な方向性を持つ企画内容を重視するという応募条件から判断して、本支援事業の趣旨に最もよく合致するものとして以下が採択された。

■展覧会名:「生きるというくわざ」:石、木、土(予定)
会場:みんなの森ぎふメディアコスモス(予定)
会期:2026 年 10 月 9 日(金)~11 月 3 日(火・祝)(予定)
企画:大久保美紀(芸術活動を行う任意団体 art-sensibilisation 代表)

【支援金額】100 万円

【選評】新たなエコロジー思想の研究者でありキュレータとして活動してきた企画者が、石(鉱物)、木(植物)、土(微生物から生体まで)といった素材について、人間中心的ではない技術観、生きるためのくわざという観点から、多様な分野で活動する作家の表現を取り上げる興味深い展示となることが期待される。日本では紹介されることの少なかったフランス在住の石彫家井上佑吉による《Mille et une têtes》をはじめ、メディアアートや刺繍など、ジャンル横断的で自由な発想が高く評価された。応募件数は7件であり、いずれも視覚文化の魅力を訴える興味深い内容であったが、2026 年度内の開催という応募条件、またコレクション等を中心とする展覧会という観点から見て、本支援事業の趣旨に最もよく合致するものとして上記の企画が採択された。